

島原半島南部北有馬町田平化石帯と火山噴出物

(5万分の1口之津・島原)

早田常盤(口加高校)

島原半島南部における地質巡検会が、この地域のモデル的巡検コースである南有馬町原城跡へ北有馬町田平のルートでえられたことは、地元会員にとって喜ばしいことであった。

9月20日、午前8時30分、前夜から宿泊されておられた一瀬会長、鎌田副会長をはじめ県南～県北の会員15名、原城跡にむかう。原城跡は東西約1.2Km、南北約1.5Kmの熱雲式による阿蘇火山噴出物である「阿蘇溶結凝灰岩」によりなる海岸段丘である。国民宿舎をでた図のX₁付近では、凝灰岩の風化した淡黄褐色～淡灰黄褐色の露頭がみられた。南海岸にいたりX₂で、洪積世前期の口之津層群を不整合に被覆した?黒灰色の湿潤な泥の堆積物の露頭をしらべる。植物の幹・枝種子などをふくみ約20m×約50mの範囲に分布している。おそらく沖積世の堆積物と思われるが、今後の調査による正確な生成時代・層序などの究明が必要であろう。

図の①の天草丸跡では、下部の洪積世後期の「阿蘇溶結凝灰岩」の浸食谷に堆積した貝層をふくむ大江層と呼ばれる地層が海食崖にみられた。大江層は垂直に近い海食崖にわずかに露出しているため、貝化石の採集は困難で、崩落物より少量採集できる程度である。貝化石にはマガキ・ハネガイ・フミガイなど内湾～浅海性種約60が産出するようである。またこの大江層に対比される地層は、有明・不知火海域にはみられないという。

9月21日、予定通り北有馬駅(島原鉄道)前に集合した会員24名。案内者から本日のルートの説明および資料の配布がおこなわれた。沖積平

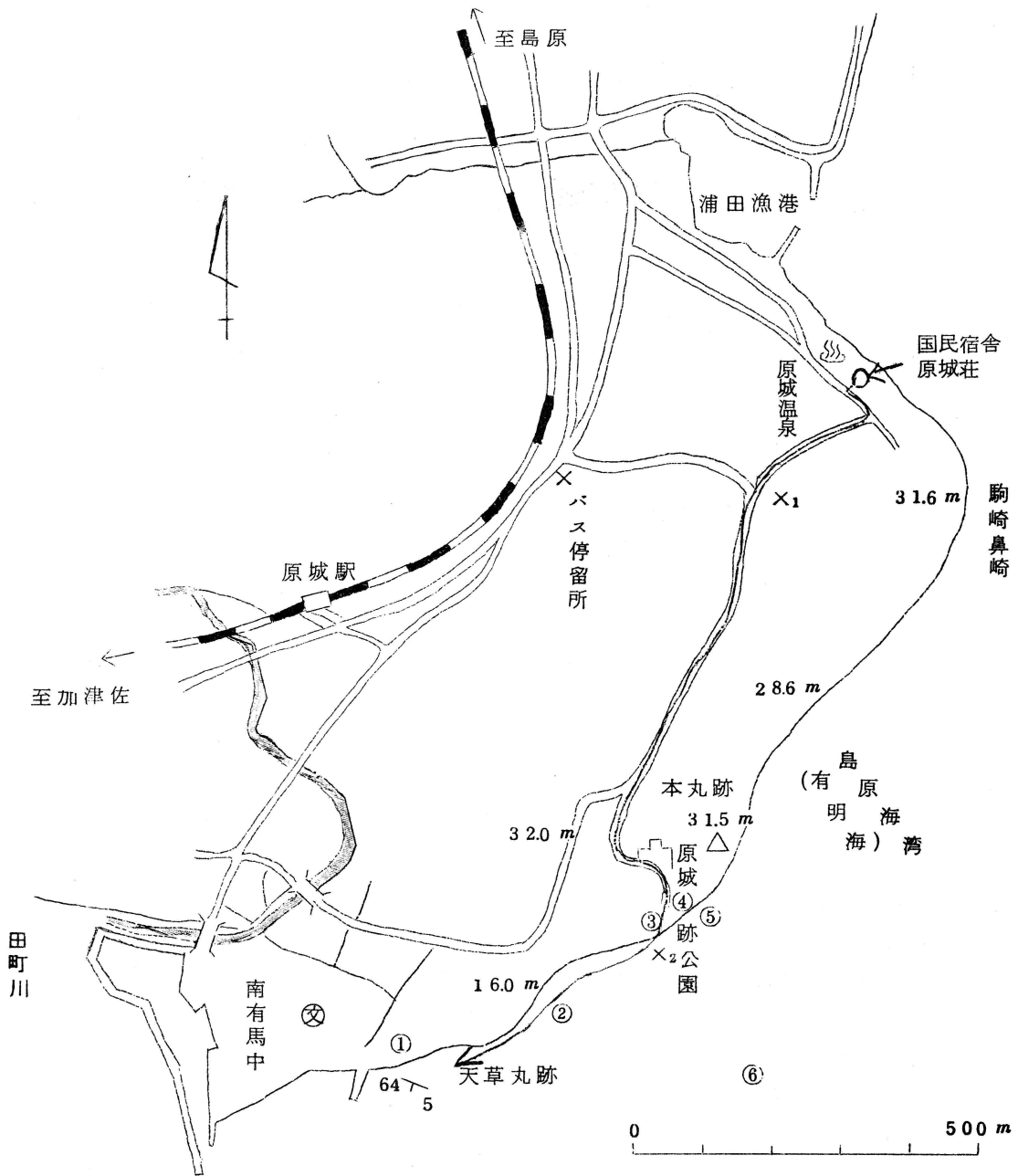
野を北から南に流れる川をはさみ洪積世前期口之津層群北有馬層(大塚裕之, 1966)の砂質シルト～砂れき層が分布し、これより内湾性の貝化石有孔虫化石が多産する。貝化石には絶滅種の *Chlamys yagurai* (Yokoyama) ヤグラニシキのほか、汽水性のマガキ・ヤマトシジミ、また有孔虫では汽水～内湾性種の *Ammonia beccarii* (Linne) キスイコマハリガイ var, などが産出する。

北有馬駅の北東約600mの澱粉工場東側の川床にてまず巻貝・二枚貝などの化石を採集。ここでは現生種の腕足貝コカメガイも発見され巡検会らしい活気がみなぎった。さらに川にそって北へ進み町立田平小学校の北西約200mの地点にてマガキの密集帯をみる。ここは化石の産状の立派な見学地であり、鎌田先生の説明によれば「カキ礁」といわれる密集帯は、カキの幼殻もふくまれるので原地性の堆積物ではないだろうかということである。思い思いに化石を採集する。化石は、石化しておらず遺骸がそのまま埋没されている状態である。田平小学校にて昼食をとる。

昼食後カキの密集帯をあとにし、次にそった北西約1Km進んだ「矢びつ」の地点にて、口之津層群と不整合関係にある洪積世中期の竜石層の露頭を観察する。竜石層は、角閃石安山岩質凝灰角礫岩よりなる一部に海生貝化石をふくむ層厚50～200mの地層で、島原半島南部に広く分布する雲仙火山をつくる基盤層の一つである。

谷を渡り、東側の郷屋付近で両輝石安山岩溶岩の露頭をみ、北有馬駅にて解散する。この地域の火山噴出物の新旧関係については、今後の調査結果をまって正確をきさなければならない。

参加者 24名(正会員23名, 学生1名)



- | | | |
|---|------------------|---|
| ① 大江層露頭
(a) 貝化石層
(b) 不整合
(c) 新期阿蘇溶結凝灰岩の転石
(標本採集に好適) | ② 海食台・ポットホール・小断層 | ⑤ 不整合
新期阿蘇溶結凝灰岩とロノ津層群 |
| | ③ 断層・段丘礫層 | ⑥ 白州と呼ばれる石灰藻の密集帯 (通常は干潮時でも海面下において見えない。) |
| | ④ 海食崖 | |

南有馬原城跡路線図